

オンリーワン教育の理念の下、 学力というモノサシだけではない 評価軸で一人ひとりの得意を伸ばす

学校存続の危機感をきっかけに 民間経験を活かしたボトムアップ改革

幼いころ、学園創立者の祖父と手を繋いで校内を歩き、ゴミを拾って褒められた記憶があります。将来教員になることを自覚して育ち、幼稚園から高校まで大阪教育大学の附属学園で触れた人間教育が私の教育観の原点になっています。大卒後、一度は教壇に立ちましたが、やんちゃな男子生徒の前に経験不足を痛感。民間企業で経験を積んだうえで事務職として学園に戻りました。

けれど直後の2000年度入試で志願者が急減。2000人以上いた生徒数が1000人に近づく危機が訪れます。そこで、民間で培った人材開発、組織運営の経験も活かしながら、全教員が当事者となる10の改革チームを立ち上げ、学校再生に乗り出しました。

先代の父の助言を基に目指したのは、学力に秀でた子だけではなく、アスリートや資格取得を目指す子、ITやゲーム好きな子、不登校だった自分を変えたい子など、幅広い層が集まる学校です。「得手に帆を揚げて」の精神で、一人ひとりの強みを伸ばして自信をつけさせる。これこそ本校が掲げる「オンリーワン

教育」であり、この理念に基づき多彩なコースを設置しました(下段参照)。さらに放課後は、「公務員講座」「英検道場」など30の講座から選択できる「KOKOKU寺子屋」を開講。自由に学びたい生徒と得意分野を教えたい教員の熱量が交差しています。こうした改革の結果、古いイメージが残る高校のみの男子校にもかかわらず志願者は急増。専願者だけで定員を上回る状態を維持しています。

過ちを認め、高い壁を乗り越える

昨年、全国大会出場を決めた直後のサッカー部で不祥事がありました。出場辞退を覚悟し落胆する部員を集め、私自身の責任に触れたうえで、こう語りました。「苦しい試練だが、松下幸之助の教えにもあるように、乗り越えたときは人生の力になる。その試練を与えられた君たちは、与えられて幸せ者だと感じられるような人生を送ってほしい」と。世間の目は厳しいけれど、不祥事と関係ない部員まで否定されるべきではありません。過ちを認め、反省し、前へ進む。その繰り返しを日本の教育はしてきたはずなのに、昨今の社会は相手が立ち直れなくなるまで叩きます。それでは社会の繁栄などありません。関係者と何度も話し合

って最終的に校長として下した大会出場の決断。日頃の信頼関係がいざというときに問われることを実感した出来事でした。

現在私は、大阪私立中学校高等学校連合会の会長として、大阪の私学ひいては日本を見据える立場にあります。学園理事長としての役割もありますが、根っこは現場の一校長です。知事と激しくやりとりした翌日、テレビを見た生徒から「校長先生がんばって」と声をかけられるなど、廊下で交わす生徒との語らいが何よりの喜びです。難病を抱えながら、好きなサッカーに触れられるという理由で本校を志望し、松葉杖を使ったアンプティサッカーの日本代表となり、薬学部に進んだ卒業生や、語学を頼りに戦火から逃れ、「学びは自由の翼となる」と全校生徒に語ってくれたウクライナからの留学生など、生徒の話は尽きません。オンリーワン教育の理念の下、生徒一人ひとりの強みを伸ばし続けます。

くさじま・ようこ／1960年生まれ。神戸女学院大学文学部卒業。5年間英語教員として勤務後、人材派遣会社、研修会社で社員育成、コンサルティング業務を経験。PHP研究所で研修講師として人材開発にも携わる。1997年学校法人興國学園入職。事務局長、副校長を経て2013年4月より現職。大阪私立中学校高等学校連合会会長ほか役職多数。